

外国籍住民を支援するための社会的要因について

—— 日本人ボランティアのインタビュー調査から ——

大 東 貢 生・富 川 拓

要 旨

この小論の目的は地域社会の中で生活する外国籍住民と日本人との共生に必要な要因を分析することとを試みることにある。このために、外国籍住民に対して支援を行うボランティアをしている日本人に対するインタビュー調査を行った。その結果から、外国籍住民と日本人との共生について以下の9要因が考えられる。①外国語教員の経験、②外国語への関心、③外国の事情への関心、④地域社会に対する愛着、⑤自分が住んでいる地域社会を外国人に紹介したいという思い、⑥人間そのものへの関心、⑦仕事上での外国籍住民支援の必要性、⑧病気などでの生活の変化、⑨ホームステイの経験。

キーワード：外国籍住民，地域社会，共生社会，日本語教育，ボランティア

1. 問題の所在

この小論の目的は、地域社会に生活する外国籍住民と日本人との共生のために必要とされる社会的要因について、外国籍住民支援のボランティアを行う日本人のインタビュー調査を通じ考察することにある。

日本における外国人登録者数が年々増加する中¹⁾、地域社会では居住する外国籍住民と日本人との間に国籍を超えた新たな関係を築くことが望まれている。つまり「違いを認め、ともに生きる」という多文化共生の思想にもとづく多文化共生社会を築くことが求められている。しかしながら、現実増加していく新規外国籍住民に対して地域社会に居住する日本人が多文化を理解し共生することはどのようにして可能なのだろうか。

特に日本人の側から見れば、元から居住する日本人は地域社会におけるマジョリティである。したがって、この関係は、(エスニック)マイ

ノリティとしての外国籍住民をマジョリティである日本人が理解することができるかどうかのカギとなるのである。この日本人の理解に対して、谷富夫(2002)は「バイパス結合」として、様々な日常生活をめぐる活動を通して、相互に理解し、相互に接触し、対立し、対話し、理解しあうという、交流、共同を通しての、マジョリティとエスニックマイノリティの新たな結びつきの必要性、可能性があるという。だから、日本人の側が、外国籍住民とさまざまな場面で、接触し、対立し、対話することが相互理解のカギとなるのであろう。

ところで、日本人の中には、積極的に外国籍住民と交流し支援を行っている人々もいる。特に、ボランティアという形式で外国籍住民支援を行っている人々も近年増加している。では、外国籍住民支援ボランティアを志した人はどうして外国籍住民との積極的な交流を望んだのであろうか。例えば、古川秀夫は、国際ボランティア団体への調査から、ボランティア活動を始めたきっかけを「国際的な活動をしたいという思

い」「異文化との接触」「他者からの影響」「外国での援助・被援助体験」「特定の課題への興味」「仕事からみ」「メディア・セミナーなど」に分けられていると言う（古川 2002：86）²⁾。したがって、外国籍住民支援を志す人々の過去において外国人との接触、あるいは、そうした人々の重要な他者を考察することによって、外国籍住民との相互理解の要因を、社会的に考えることもできるのではないだろうか。

したがって以下では、多文化理解のために日本籍住民には何が必要とされているのかについて、積極的に外国籍住民支援に取り組んでいる人々の語りを分析しようと思う。その際、①ボランティアを志した直接のきっかけ、②それ以前にあった接点、③接点と関係する生育環境から、考えたい。

2. 調査の概要

2003年5月から9月にかけて、S県H市の日本語支援ボランティア団体である「S」の日本語教室で日本語の指導を行っている日本人6名に面接によるインタビュー調査を行った。このインタビュー結果を、2003年10月から2004年1月にかけて文章化した。

3. 結果と考察

以下では、インフォーマントごとに、インタビュー結果の中から関連する項目を抜き出し、解釈を加えたい。なおスクリプトにおいて丸括弧（ ）内は筆者の観点によって言葉をおぎなった部分である。

3. 1. Aさんのインタビュー結果から

Aさん（59歳・女性）は、日本語支援ボランティア団体「S」の創設者である。現在は団体代表をBさんに譲っている。

3. 1. 1. ボランティアを志した直接のきっかけ

Aさんが「S」を設立したきっかけとして以下のように語っている。そもそもAさんは、「S」設立の前に、「V」という国際交流のボランティア団体を組織していた。

「V」（H市の別の外国籍住民支援ボランティア団体）は1988年に設立されておりまして、これは日本語指導だけではなくて、「いろいろ日本に滞在してらっしゃる外国人の方との交流を深めましょう」ということで、いろいろな活動をしているグループなんです。「V」というところで代表のOさんと二人で「実技を勉強しなくては」ということで日本語指導部というものを設けて、日本語指導をボランティアとして始めたというのが、ボランティアに入る一番の実践のスタートということです。

「V」がH市では一番初めに日本語教室を開きましたが、その数年後にH市がバックアップしているH市国際協会というところですね。そちらの方が中心になって日本語教室を開かれました。それが水曜日の夜ということなんです。Vは土曜日の午後。それで（外国籍住民である）学習者からですね、やはり勤務体系によりまして「水曜日にも行けない、土曜日にも行けない」（という声が出た）。それで「日曜日は休みだから、日曜日の教室を」と言われてたんです。

以上のようにAさんには、「S」を設立する前に外国籍住民との交流・支援のボランティアの経験があり、外国籍住民からの要請によって別途「S」を設立している。したがってAさんには、ボランティアを始める以前から、外国籍住民支援・国際交流への関心があったと考えられる。

3. 1. 2. それ以前にあった接点

では、なぜAさんは日本語教室としてボランティアをすることになったのであろうか。この経緯についてAさんは次のように語る。

私が日本語指導に私が入ったきっかけというのは、国語と英語の教員の経験がございまして、日英語比較に興味を持ちました。それでそのときに「日本語教育という分野がありますよ」ということを知りまして、勉強から始めた。その当時は大学、大学院ともに日本語教師の養成の学部はほとんどございせん。どちらかといいますと英語を専門としている方々が日本語教育の方に多数入っておられましたので、英語から日本語というそういう流れで。私の方もそういった分野があるということをこの年まで知りませんでしたので、「非常に面白いな」と思って入ったのが、きっかけなんです。

Aさんは国語と英語の教員があり、その経験から日本語教育を始めたと言っている。また、Aさんは現在の仕事として大学の非常勤講師で、留学生たちに日本語指導をしている。有償・無償に関わらず日本語教育を行っていることからすれば、Aさんの外国籍住民支援の要因は、語学への関心があったことから始まっているのではなかろうか。

3. 1. 3. まとめ

Aさんは語学への関心から日本語教育を学び、指導を行うことになり、さらに日本語教育という仕事やボランティアを行うことに結びついている。この過程は、困っている外国人に直面して何とか支援をしたいという強い動機があったからとも考えられる。過去の教員歴でも外国人の学生に対して何らかの接点があり、仕事からの外国人支援が遠因となっているかもしれない。

3. 2. Bさんのインタビュー結果から

Bさん(62歳・男性)は「S」の現在の代表である。

3. 2. 1. ボランティアを志した直接のきっかけ

Bさんは「S」で外国人支援ボランティアを始めたきっかけを次のように語っている。

(定年後は)ボランティアをしようと思っていました。会社も長いこと勤めていましたので、これからは無理して仕事を探してやるよりは自由に、残された時間を、今まで会社でやっていた経済的なことよりも、少し変わった分野を出来たら良いなと思って、ボランティアの講座に参加していたのです。その中に「V」の日本語教師養成講座があって、それを受けたのがきっかけですね。他にもありましたがこれに絞りました。定年を少し早く、59歳で辞めましたから。これ(S)を始める年の前の8月に「V」の研修を受けまして。仕事を辞めたのは5月でしたが、すぐにやりたいことを探すためにボランティアの講座を受けまして、これでいこうと固まったのが12月でした。

(「S」でボランティアを)いくつかやってみてこれが自分にあうかな(と思って)。他にも、福祉、障害の方に食事をさせたりしている人のことを聞いたり、実際、障害者の方の養護ですね、これは何回か行きました。講習も受けたしね。福祉養護のボランティアに2、3月行きました。しかし、決まった日(活動日)が悪かったしくつも出来ないで、一つに絞りました。まあ、自分なりに考えてこれだったら自分で出来るかなと思ったのです。

(外国語にたんのうなのですかとの問いかけに対して)いえ。これを機会に、英語を勉強しなければならないということで、英会話を。それを機会ではないけれど、ちょっと前から将来海外ボランティアに行った時、英語も必要ということもあったんで、これをやってからはよりは熱心になった。英語がたんのうだからこれをしたのではないし。

以上のように、Bさんは離職をきっかけにして、今までの人生を振り返り「経済的なこと」ではない分野として、ボランティアを志している。そしていくつかのボランティアを経験した後、外国籍住民支援ボランティアとしての日本語教育を選択している。その選択の要因となったのは外国語のようである。

3. 2. 2. それ以前にあった接点

では、なぜBさんは外国人支援ボランティアをすることになったのであろうか。この経緯についてBさんは次のように語る。

(それ以前のボランティア経験は) ないですね。できなかった。仕事で余裕がなかった。(でも) 海外ボランティア(団体)やNGOの会員には早くからなっていました。一番古い、里親のボランティア、それは会員ですが、「里親になる」ということで、月々(お金を)送るという形のボランティアには関心があったので。自分が実際に体を使ってするというのは、職から離れてから。チャンスがないので、そういう(離職という)状態になったのでしょうかということになった。学生時代はやっていない。その時はボランティア、ボランティアと言っていない。最近になって一般的になって、みんなもやりだすようになったけれども、それはある程度ここ数年そういった形になったけれども、わたしらの若い時分、学生時代、学校でもボランティアということ聞いたことが無かったかもしれません。

それ(援助などの関心について)はあったかもしれません。そういったやっていると。里親とか、海外の貧しい国々のことを新聞、ニュースなどで関心があった。40歳過ぎてからだと思います。

Bさんには「S」への参加以前についての直接的なボランティア経験はないようであるが、40歳を過ぎてから海外の子どもたちへの送金という形で海外ボランティアを行っていた。外国の事情について以前から関心があり、その関心や海外ボランティアへの関心が、現在の外国籍住民支援ボランティアを行う遠因となっているようである。

3. 2. 3. 接点と関係する生育環境

では、Bさんが外国の事情に関心を持ったきっかけは何だったのであろうか。

独身、結婚の時は(海外ボランティアについて)考えることはないです。(両親などのボランティア活動に関して)それはなかったですね。うちは農業、働くことだけで、日々貧しかった。その日仕事を終えるだけでせい一杯でしたからね。

以上のように、40歳以前には海外に関する関心もなく、両親からの影響もほとんどなかったようである。

3. 2. 4. まとめ

Bさんは、定年直前になってこれまでの人生を振り返り「経済的」な生き方から別の生き方をするために外国籍住民支援ボランティアを志している。その際の外国籍住民支援ボランティアを選択したのは、40歳以降の「外国の事情への関心」や「海外の子どもたちへの送金という形での海外ボランティア」があった。さらに日本語教育という視点からみると、Aさんと同じように外国語(英語)という語学への関心があったと考えられる。

3. 3. Cさんのインタビュー結果から

3. 3. 1. ボランティアを志した直接のきっかけ

Cさん(61歳・男性)は「S」で外国籍住民支援ボランティアを始めたきっかけを次のように語っている。

(55歳以降の働き方は)月15日ぐらい(の出勤)かな。「ちょっと余裕が出来る」と思ったから、「もう一つ(ボランティアを)やりたいな」と思って。

今年(2003年)の2月ぐらいですかね。たまたま、市の広報関係で見て、そしてまあ見学して始めたって事なんです。応募したのは4月から5月ぐらいです。たまたま(市の広報で)見て、「S」だけ見にいって、「ああ、(ここにしよう)」と思ってきただけ。広報見ても「外国なんやろな、外国の人の」ということやったから。

Cさんによれば、「S」への参加はたまたまであり、外国人との接点を持つために「S」でボランティアを始めたという。

3. 3. 2. それ以前にあった接点

では、Cさんはどのようにして外国人との接点を積極的に持つようになっていったのであろうか。

社会人の時は55歳(でH市に住むまで)まで

なんにもないです。家庭があるし、ほんとで金融機関だし、ボランティアする余裕全然なかった。(会社を選択するときに、地方勤務のある会社を選択したのは)北海道から沖縄まで都道府県に(支社が)1つずつあるから。そこへ毎月いくから。そこでいろんなところを見るから。それはそれでいろんな見るのが好きだったということはある。好きなのと、歴史と、いろんなのと、これはね。好きなのは街道が好きなんです。街道歩きが。中山道とか、東海道とか、伊勢街道とか。司馬遼太郎が好きなんです。司馬遼太郎の『街道をゆく』よ。あれの愛好者。一巻から、あれは湖西に行く第一巻があったやん。司馬遼太郎は滋賀大好きや。湖西第一巻や。湖西とか甲賀とか五つ書いてるやん。要するに司馬遼太郎の愛読者。『街道をゆく』。ああいうのが好きやねん。

以上のように、社会人時代にはボランティアに対する関心はなかったようである。Cさんによれば、当時は「歴史」「街道」に対する興味があったようである。

その後定年を迎え、CさんはH城のボランティアガイドを行うようになる。

きっかけはこちらのH城のボランティアガイドやとったこと。僕は転勤族です。こちら(H市)へ帰ってきたのは、55歳の職制定年で帰ってきたんですね。60歳になってから、まあ完全に定年になってからとかいうんじゃない。元氣なときから何かやりたいな」と思って。もともと会社関係でも全国出張してたり、知らないところ見たり、文化見たり、いろんな地方見たりするの好きだったから、旅行なんかしてし、そんなきっかけでいろんなところ見てたりしたから、まあそういう歴史的なものも好きであるし、ちょうどまたまH城もあるし、それでガイドを。これは土日だけですけど。そんなときはずっと勤めてたから。

(きっかけは) どちらかに(ボランティアガイド募集の広告が)貼ってあったんかなあ。そこで市役所に聞いたんですよ。市役所が直接案内出して。それで始めたんです。ボランティアガイドを(しておると)いろんな所から(観光客が)来る。来る人に対して、僕は県外に出張して各地方を見るのが好きやったから大概相手が出来

るんだよ。そういうあれも、もともと新しいもん見るのが好きやったからね。

(観光客の中には)植物に興味のある人もいるし、歴史に興味がある人も(いる)。自分自身が楽しみながら調べて。歴史が好き人は質問をされるから、歴史の本を読んだり、古城の本読んだり。H市に良くなってもらいたいし、またリピーターとは言わないけれども来てもらいたい。

H城のボランティアガイドは、歴史に対する興味に加え、H市に対する愛着からもきっかけになっているようである。ただしCさん自身はS県出身であるがH市の出身ではない。Cさんの配偶者がH出身であり、不動産購入などのためにH市に居住するようになったとのことである。

このボランティアガイドと平行して、Cさんに影響を与えたものとしてCさんは次のように語る。

H市が、友好関係で2年に1回、中国のS市へ友好使節団組んで行ってます。それで民間人が7、8人ですかね、市の関係者なんかで(全員で)14、5人で行ったり来たりして、文化交流やってますわね。それに応募したんですよ。そして3、4年前に中国に行ったんかな。そこで初めて外国へ行って、それも普通の外国旅行と違って幼稚園を見学したり、学校へ行ったり、中学校へ見学行ったり工場へ行ったりと、いろんな所見られたんじゃないかな。その中に家庭訪問ですか、家庭で夕食よばれたりして、いろんなお話をしたりする家庭訪問があったんです。いろんな所見て、異文化というか外国に、一応垣間見たというか、ほんの少しかもわからないけど、普通の人よりちょっと見たと、そう言う経過があったものですから。

それで、ガイドしてますと、ガイドやってる人でもね、中には中国語を話せる、まあ、中国語の人もあるけど、英語話せる人は英語、外国人の、そう言う登録してる人何人かいるんです。中国語も1人ぐらいおられるんかな。ほんとにまだ元氣でしたから、外国に行ったことはなかったから、H市のそれで行って、外国に、異文化に興味わいて、それで「接する機会がないかな」と。ただ、どう言うんですかね、生のね、

ほとんどの外国の生活を知るといふか、考え方を
知るといふかなんかそう言うチャンスがないか
なと。外国の人と接する、それをずっと考えて
る。単なる旅行へ行くんじゃないかと。そして、
このボランティアガイドの広報がありましたか
ら、ちょっと忘れましたが市の広報かその一
般、要するに記事が載ってまして、これなら外
国の人と接せられるんじゃないかなと。自分自
身は外国の人と接せられて、余談で話してい
て、接しているというんな事が「あんたどうしてんの」
とかそういう事が知れるかな、と言う頭があ
ったんです。実際にやってみて、日本語教えるとい
うか日本語は自分自身も勉強にもなるし、ある
面は目標達成なんですけどね。

H市が中国S市と友好関係を結んでいるため、
あちこちについて様々なものを見ることが趣味
であったCさんは、S市の友好使節団に応募し
た。そこでの外国の人々の生活を垣間見たこと
で、異文化への関心が生まれ、地域社会での外
国籍住民との直接的な交流のために日本語教室
というボランティアを志したようである。

3. 3. 3. 接点と関係する生育環境

こうしたCさんに外国人との接点での要因は
ないのであろうか。両親やきょうだいとの関係
を以下に見てみる。

親父は民生委員だとか、世話好きというか、
悪い言葉で言えばお節介焼きというかな、一生
懸命やってた。母親は普通の家庭の主婦。ボラ
ンティアに関して両親の影響はないだろうね。
ただ親父は親父でそうやってた。ただ僕ら
は一緒に住んでないからね。正月に帰ってきた
ときに、何やってんだ、て聞いたら。兄妹は3
人。あと女。ボランティアはやってないやろな
あ。娘は幼稚園の先生。ボランティアはしてな
い。

世話好きだという両親持っていたことは、C
さん自身は関係ないとは言っているが、Cさん
自身の「世話好き」や「好奇心旺盛」とどこか
接点があるのかもしれない。

3. 3. 4. まとめ

Cさんによれば、「S」への参加はたまたま

であり、外国人との接点を持つために「S」で
ボランティアを始めたという。そのCさんは、
社会人時代にはボランティアに対する関心はな
かったようである。Cさんによれば、当時から
「歴史」に対する興味があったようである。H
城のボランティアガイドは、歴史に対する興味
に加え、H市に対する愛着からもきっかけにな
っているようである。その後、H市が中国S市と
友好関係を結んでいるため、あちこちについて
様々なものを見ることが趣味であったCさんは、
S市の友好使節団に応募した。そこでの外国の
人々の生活を垣間見たことで、外国への関心が
生まれ、地域社会での外国籍住民との直接的な
交流のために日本語教室というボランティアを
志したようである。世話好きだという両親持
っていたことは、Cさん自身は関係ないと言っ
ているが、Cさん自身の「世話好き」や「好奇
心旺盛」とどこか接点があるのかもしれない。

3. 4. Dさんのインタビュー結果から

3. 4. 1. ボランティアを志した直接の きっかけ

Dさん(65歳・女性)は「S」で外国籍住民
支援ボランティアを始めたきっかけを次のよう
に語っている。

私が何故日本語の指導に興味を持ったかと言
いますと。以前ね、Cという工場の近くに事務
で働きに行っていたことがあるんですね。その
時に外国人(フィリピン)の労働者が正規で入
ってきて、派遣会社の研究員みたいな形で日本に
おられるという制度ができた、ちょうどその時
やったと思うんですけど。それでまったく誰も
英語が話せなくて困ったんですね、会社が。多
少英語を話せても通訳をできる程の力が皆さん
なかったんです、私を含めてね。それで外国人
の日常生活が、買い出しに行ったり不満を聞い
たりといったことができなくて。私はたった一
人で事務をしていたんですけども。時間的余裕
がありましたのでね。それで(外国人の方と)
買い物に行ったり、一緒に(食べに)行っ
たり、一緒にしたりそういうことをしてまして。

やはり日本語を、誰かが教えて（ということが必要）。（外国人が）日本語を話す近道だというので。その会社の専務さんが教えられていたんですけれど。いざ何をこうどうして教えたらいいのかね、見当がまったく付かなかったんですね。そういう興味を持ったというのがきっかけ。「何かプラスになるかなあ」と言う。実際、ボランティアしてまして。最初はもう音声だけしてましたんですけれども。日本語の指導講座がありましたんで。それでこうちょっと（行きまして）。で、「S」が設立した時に「そのまま引き続きこちらに」と言われましたんで、そのままずっと。教科書使わないで、体当たりで。

以上のようにDさんは、会社の方針で突然外国人が来て、指導をする必要性を感じたということがきっかけになっているようである。仕事
が接点となって外国籍住民と接触しなければならなくなったということであろう。

3. 4. 2. それ以前にあった接点

Dさんは、外国籍住民支援ボランティアにスムーズに展開があったようであるが、その要因となっているのは何であろうか。Dさんは以前のボランティア活動に対して次のように語る。

実はですね、5年前までは国際交流会館、そのボランティアって言うんでしょうかね、ホームステイの受け入れとか。そこで少し短期間ですけど。ええ、そうです。いろいろそれ以外にも来られるんですね。韓国とか。わたしは少し言語の方に興味がありまして。別に何を研究だとか、そうあれではないんですけれども、個人的に。やっぱり世界を知るためには言語がいる。（ホームステイ）はたくさん見えましたよ。アメリカもそうだし、韓国の方とか、バングラディッシュの方とか、フィリピン、スウェーデン、えーいろいろありましたね。ブラジル。（ホームステイの受け入れに際して、受け入れ側として勉強したのかという問いに対して）そうですね、「S」ほどはしっかりしたあれではないんですけれど、そういった保護者とか専門の先生だとか来ていただいて、もたれまして、三ヶ月くらいですね、講師として、週一くらいで。そういうコースを受けました。

以上のように、Dさんには、外国人と積極的に付き合うことが「S」以前にホームステイの受け入れとしてあったということである。

3. 4. 3. 接点と関係する生育環境

では、そのホームステイ受け入れのボランティアをどのようにして引き受けることになったのであろうか。

小さい頃はどちらかというと引っ込み思案。今でもそうですけど、活発ではありません。動くことは好きですけど。人前に立つことが余り好きじゃあない。現在は自分の思い通りに生きてきます。それは主人が望むこと。

（ボランティア活動を今までやって来られたご自身の中で、変わったなあと思うようなところはありますか、という問いかけに対して）余り負担にはなくなってきました、造作がね。大変じゃないですけど。変わってきたのかどうか。最初は、やっぱりボランティアをしてますという感じではなかったのかな。自分でね。楽しみながら、（ご自身では「活発ではない」と言っておられましたけども、こういった日本語教室に通われて、活発になってこられたのですか、という問いかけに対して）一対一だからできるんです。教室で教えて下さいは絶対できないんです。たまたまね、一対一とか、二対一ぐらいですか。一人でやっている分はいいんですけど。誰か他の日本人がいるとちょっと緊張するんですよ。一人でやるんでしたらいいと思うんですけど。

Dさんは幼いときには「引っ込み思案」であったと語る。そうしたところは現在も残っているようである。

3. 4. 4. まとめ

Dさんが「S」で外国籍住民支援ボランティア活動をする直接のきっかけは、勤めていた会社に突然外国籍住民が来て指導をする必要性を感じたからである。仕事
が接点となって外国籍住民と接触しなければならなくなったということであろう。こうした必要性がすぐに行動に移せたのは、それ以前にホームステイの受け入れとしてあったからである。Dさんは幼いときには「引っ込み思案」であったと語る。そうした

ところは現在も残っているようであるのであれば、ホームステイの受け入れについて積極的にやっているのであらうか。ホームステイに関してはDさんの家族、外国籍住民支援ボランティアについても親しい人々からの助言などがあったからかもしれない。

3. 5. Eさんのインタビュー結果から

3. 5. 1. ボランティアを志した直接のきっかけ

Dさん(21歳・女性)は「S」で外国籍住民支援ボランティアを始めたきっかけを次のように語っている。

「S」の活動に入ったのは、今年(2003年)の1月くらいから始めて、実際に外国の方に指導し始めたのは3月です。だいたい半年くらいなりましょうか。参加しようとしたきっかけというのは、なんかの募集を見てなんですけど、外国の方と接してみる、向こうの文化を知ること出来るだろうし、興味もあったからです。その募集はポストの中に入ってあった市の広報みたいなものです。

その外国人の方と接する良い機会だというのは、外国に行ってみたくとか、外国の文化とか習慣とかを直接見たりとか聞いたりとかに興味があるからです。外国に行ってみたくと思ったのは、中学校の時からです。具体的にアフリカに行ってみたかったんです。また漠然とアメリカにも行きたかったんです。しかし、なんでかは覚えてないんです。今考えると、あまり知られてないし、あまりにもほんとに未知の世界じゃないですけど、だからだったのかなぁと思います。

またボランティアをやろうと思ったのは、向こうに行ってみて将来就職しようとは思わなかったんですけど、身近で言うか、近くで話せたりとか出来るから。だからボランティアって、そんなに経験とか技術とかいいですよ、これからやっていけばいいということだったので始めたんだと思います。

今までクラブ活動とかバイトとかをやっていた時間がボランティア活動に代ったと言うことです。クラブ活動とかしてたら休みたいので、

休みの日は休みになるので。今は他の日が休みなので日曜日にボランティアをしています。

以上のように、Eさんのきっかけは、外国人と接してみることや外国の知識を得るためである。また今までのクラブ活動がボランティアに変わった。

3. 5. 2. それ以前にあった接点

ではなぜEさんは外国への興味を持ったのであろうか。このことについてEさんは次のように語る。

中学の時から、外国の方と接するのは旅行に行ったりとかではあります。外国の人と触れ合ったというのは、「グアム・サイパン」への船旅というのがあって、その班員の中にグアムの人がいり。それは(外国人は私の班では)一人くらいでしたけれど、他の全員の中には何人かいたりとか。去年モンゴル行ったときにはモンゴルの人と接しました。グアムの船の旅行は高校生の時に、モンゴルは大学生になってからです。モンゴルへは、**先生って先生についているんですけども、**先生がモンゴルの研究をなされてる方で、毎年そのゼミの三回生はモンゴルに調査に行くってことで行きました。これが三回生の時ですね。

アフリカに対する魅力というのは、中学の時は漠然だったんですけども、今でもそんなにあんまり変わってない。そんなに調べてるわけでもないです。『ただ観てみたい』っていう感じなんで、あんまり変わってないかもしれないですね。

Eさんにとっては、外国に旅行に行った経験が高校・大学とあり、また中学の時から外国人との接点はあったらしい。こうしたことやEさん自身がアフリカに行ってみたくという希望を持っていたこともあり、クラブ活動が引退を迎えた後、外国籍住民支援ボランティアに関心を持ったということであらうか。

3. 5. 3. 接点と関係する生育環境

では、こうした外国への興味はどのようにして生まれたのでしょうか。Eさんは次のように語る。

両親は、「やりたいことはやらせる」、やらしてもえるというか。「やりたいならやりなさい」というような感じでしたね。両親もそのような感じで生きてのですね。たぶん、そうなんじゃないか。わからないですね。

小中高を通じて自分はという風な子どもでもあったかと言うと活発でした。みんなが活発だったので。みんながやりたいようにやるという感じだったので。だいたいそうでした。やりたいことはやる。

(大学の専攻も)自分の興味のある学部があったからです。両親はちょっと反対しましたが。でももう「行きたいんだから」って言ったら「行っておいで」って感じでした。大学で地域文化コースというのを選んだと言うのは、アジア・アフリカに興味があったからです。

Eさんは、両親の「やりたいことはやらせる」といった教育のもと、アフリカへの興味など発展させる形で現在のボランティア活動を行っているようである。

3. 5. 4. まとめ

Eさんは、外国籍住民支援ボランティアを行うきっかけを外国人と接してみることや外国の知識を得るためであると捉えている。Eさんには過去、外国に旅行に行った経験が高校・大学とあり、また中学の時から外国人との接点はあったらしい。こうしたことやEさん自身がアフリカに行ってみたいという希望を持っていたこともあり、クラブ活動が引退を迎えた後、外国籍住民支援ボランティアに関心を持ったということであろうか。

Eさんは、両親の「やりたいことはやらせる」といった教育のもと、アフリカへの興味など発展させる形で現在のボランティア活動を行っているようである。

3. 6. Fさんのインタビュー結果から

3. 6. 1. ボランティアを志した直接的きっかけ

Fさん(53歳・男性)は、「S」で外国人支援ボランティアを始めたきっかけを次のように語っている。

「S」のボランティアに僕が参加した経験は浅いんです。今年の4月ぐらいだったと思うんですけどね。2月頃にH市の広報かなんかに「ボランティア募集」というのが載ってまして。僕は、2月、3月は仕事の引継ぎのことでバタバタしておったもので、4月頃になって体が落ち着いたものですから、Hさんに連絡して「今から参加できますか」ということで。だから、このボランティアを始めるきっかけになったのは、「何かしようしよう」と思って気を配っていて、たまたまこのことが載っていたから「いいなあ」ということです。

外国人のボランティアをやってみたいと思ったのは、ひとつはね特殊というか体の都合で。商売、小売店ですから本当は定年も無いんですけども、ずっと仕事をしながら人も使ってたからね。今は(商売は)していないんですけど。去年一年間は入院、入退院を繰り返したもので「闘病と商売を両立していくことは難しくなるかな」と甥に商売を譲ったんですね。それは規定の路線で、そのつもりで甥も3年程前から一緒に商売をやったから。だから商売を譲って、闘病に専念するということであんなにじっとしているということになった時点で、「ぼーとしているだけではないかん」のでなんかできることね。「金儲けはできませんから、ボランティアでも」と言えば失礼でやけど。という意味でいろいろ気を配っておって、広報でこういうことを見つけて。

それともうひとつは学校が外国語大学を出ているものですから、もともと外国語というのに興味がありますし。旅行とかね。外国人と接するのは嫌いじゃありませんし。Mセンターでもだいぶん付き合いがありましたから。そういう意味でもいい仕事というか「ボランティアだなあ」と思って、やらしてもらっているんですけどね。毎週日曜はこれをやっているんです。ここが日曜日の午前中に設定されているのは、学習者も働いている人が多いし、そして教える側もみんなみな定年で(毎日あいている)人というのがあるからじゃないかな。日曜日の午後

というのも中途半端やし、土曜日もし休みの会社やら休みじゃない会社やらあるんじゃないかな。

以上から、Fさんが外国籍住民支援ボランティアを志したのは、闘病生活の中でなにか出来ることを探していたとき、たまたま広報で見つけたのだが、もともと外国語学部を出ていて外国語に興味があり、外国人も嫌いではなかった。時間も合っているからである。

3. 6. 2. それ以前にあった接点

では、外国語や外国の事情に興味が出来たのはなぜであろうか。これについてはDさんは次のように語っている。

大学は外国語大学へ。行ったきっかけは、受験科目の都合とか、偏差値の都合とか、そんな深い理由はないですけどね。どっちかというと理科系ではなかったですね。語学が好きだったということもないんです。消去法で残ったくらいなもので。「変わったもの」という意識はありましたけど。外国語学部でもその頃だったら、英語とか、フランス語とか、ロシア語なんかも人気があったかな。中国語なんていうのはまだまだでしたけどね。だから就職とかにも有利なポピュラーなとかメジャーな外国語よりも、ちょっと人数が少なくて面白い、例えばモンゴル語とか、そういうところも考えていたんですけどね。ちょっと変わったという意味で。特にタイに関心があったというわけではないです。タイの方には行ったことは一度あります。学生の時は、主にバイト、パチンコかな。まとまったことはしていませんね。サークル活動も無いですね。ただ、旅行が好きで一年休学して旅行に行きました。自転車で行きました。自転車で日本一周したんです。「外国ではなく、まず日本」と思いました。「いずれ外国にも」とは思っていましたが、大学時代には行ってないですね。

Fさんはもともと外国語にはそれほど関心はなかったようである。たまたま受験科目の都合で外国語大学を選び、学んでいく内に言葉に対する興味が芽生え、外国に行くことによって外国人も嫌ではなくなったということであろうか。

ボランティアに当てはまるかどうかわかりませんが、Mセンターからの留学生のホームステイの受け入れというのはしていました。けれども、それ以外にボランティアというのは無かったように思いますね。地域活動も余り加わらなかったし。またPTAの活動というのも無いですね。小売店でしたからね。日曜祭日営業でしょう。そういう意味で、子どもにも申し訳ないと思うくらい、子供が小学校中学校とかPTAとか地区の何とかとか、そういった活動とか殆どタッチできなかったですね。仕事は普通のサラリーマン以上に時間に縛られて、休みもはるかに少なかったです。それでも、語学を学ぶということはやっていました。ホームステイの方も受け入れていました。

Mセンターに来る学生のホームステイを受け入れたりとかは、Mセンターができた時からです。僕は英語喋ったりするの好きでしたからね。生徒として、何回もお金払って行っていたりして。それで「もしホームステイを希望する学生があれば受け入れますよ」という登録しておいて「こういう生徒が希望してますけど、受け入れてくれますか」という問い合わせがあると、延べ4人、5人受け入れたりしましたけどね。それは、だいぶん前です。20年前くらいから10年くらい前かけてですね。

英語を学んでいたのは、年に春夏学期と秋冬学期とか言うて毎週夜二回。社会人のための英語プログラムちゅうようなね。いろんなプログラムがあるんですけどね。昼間行くプログラムとか、夜だけとか、日曜だけとか。ほんで夜の二時間ほど週二回を3ヶ月くらいかな。6万か、7万の月謝でね。ずっと今もやってますけどね。それに寄るといろんな学生とか社会人とか20人かそこら集まっていた。毎年2回づつあって。いろんな交流とかあったりして。そういうの好きでしたからね。けっこう6万、7万もいい金額でしたから毎回毎回というわけにもいきませんですけどね。とびとびで何回は。延べ5、6回は受けてました。Mセンターがこちらに移ってきてから、20年の間に断続的に。それから後は教室に行かなくても生徒を受け入れたりとかね。一度、ホームステイさせた生徒がMセンターを卒業しても、「まだ日本にいたいんで、もうちょっとおらしてくれ」とか、あるいはアメリカに帰ってあくる年もう一遍日本に来て「もうちょっと住まわしてくれ」とか。そういった繋がりもありましたね。

Fさんが外国人を受け入れた理由として、ホームステイがあるようである。外国語大学出身の経緯からFさんは外国語（英語）が好きになり、地域の公共施設で英語を自主的に学び、またその中でその施設の介在によってホームステイも自主的に受け入れているようである。

3. 6. 3. 接点と関係する生育環境

では外国語大学に進学する要因となったものは何があるのだろうか。Fさんは次のように語る。

（今までの人生の中で影響を受けた人は）ないですね。特に誰かに会ったことによって考え方が「ごろっ」と変わったというか、ああいった感じはないですね。またこういった本を読んだので、何か変わったこともないですね。本は好きですから、たくさん読んでますけど。感動した本はいくらでもありますけど、それによって目からうろこだとか、なるほどとか、泣けてきたとか、そういうことは殆どないですね。

両親も親族も兄弟もボランティアの経験はあんまりないですね。母親は、ボランティアというか田舎のことですから商売がらみで、仲人は片親ですからできませんけどね、男と女とを結びつけるというかそんな役目をしてましたね。商売をして、今と違って行商みたいなもんですからね。田舎ですから、とにかく出歩いて商売していると「あそこの息子はまだや」とか、「あそこの娘は売れ残っている」とか、「年頃や」とか、いろんな情報がありますから。それをくっつけて、そしてうちの家で見合いさせて結び付けるとかね。そういう例がたくさんあって、僕の子どもの時でも学校から帰ってくると、家で見合いしていることがしょっちゅうある。それがボランティアと言えば、言えるかどうか。

Fさんによれば、両親や親族からボランティアに対する親しみや外国籍住民支援を感じさせるモノはないようである。

3. 6. 4. まとめ

Fさんが外国籍住民支援ボランティアを志したのは、闘病生活の中でなにか出来ることを探していたとき、たまたま市の広報で見つけたのだが、外国語学部を出ていて外国語に興味があ

り、外国人も嫌いではなかったし、時間も合っているからである。しかしFさんはもともと外国語にはそれほど関心がなかったようである。たまたま受験科目の都合で外国語大学を選び、学んでいく内に言葉に対する興味が芽生え、外国に行くことによって外国人も嫌ではなくなったということであろうか。そのFさんが外国人に対して嫌ではなくなった理由として、ホームステイの受け入れがあるようである。外国語大学出身の経緯からFさんは外国語（英語）が好きであり、地域の公共施設で英語を自主的に学び、またその中でその施設の介在によってホームステイも自主的に受け入れているようである。

こうしたFさんに両親や親族からボランティアに対する親しみや外国人支援を感じさせるモノはないようである。

4. 要約と課題

4. 1. 要約

この小論の目的は、地域社会に生活する外国籍住民と日本人との共生のために必要とされる社会的背景について、外国籍住民支援のボランティアを行っている日本人のインタビュー調査を通じ考察することである。多文化理解のために日本籍住民には何が必要とされているのかについて、積極的に外国籍住民支援に取り組んでいる人々であるAさんからFさんまでの6人の語りから、①ボランティアを志した直接のきっかけ、②それ以前にあった接点、③接点と関係する生育環境、から解釈を試みた。

Aさんは語学への関心から日本語教育を学び、指導を行うことになり、さらに日本語教育という仕事やボランティアと結びついている。この経過は、困っている外国人に対して何とか支援をしたいという強い動機があったからとも考えられる。過去の教員歴でも外国人の学生に対して何らかの接点があり、仕事がらみの外国人支援が遠因となっているかもしれない。

Bさんは、定年直前になってこれまでの人生を振り返り「経済的」な生き方から別の生き方を志す為に外国籍住民支援ボランティアを志している。その際の外国人支援ボランティアを選択したのは、40歳以降の「外国の事情への関心」や「海外の子どもたちへの送金という形で海外ボランティア」があった。さらに日本語教育という視点からみると、Aさんと同じように外国語（英語）という語学への関心があったと考えられる。

Cさんによれば、「S」への参加はたまたまであり、外国人との接点を持つために「S」でボランティアを始めたという。そのCさんは、社会人時代には外国人支援ボランティアに対する関心はなかったようである。Cさんによれば、当時から「歴史」に対する興味があったようである。H城のボランティアガイドは、歴史に対する興味に加え、H市に対する愛着からもきっかけになっているようである。その後、H市が中国S市と友好関係を結んでいるため、あちこちにいった様々なものを見ることが趣味であったCさんは、S市の友好使節団に応募した。そこで外国の人々の生活を垣間見たことで、外国への関心が生まれ、地域社会での外国籍住民との直接的な交流のために日本語教室というボランティアを志したようである。世話好きだという両親持っていたことは、Cさん自身の「世話好き」や「好奇心旺盛」とどこか接点があるのかもしれない。

Dさんが「S」で外国籍住民支援ボランティア活動をする直接のきっかけは、勤めていた会社に突然外国人が来て指導をする必要性を感じたからである。仕事が接点となって外国人と接触しなければならなくなったということであろう。こうした必要性がすぐに行動に移せたのは、それ以前にホームステイの受け入れとしてあったからである。Dさんは幼いときには「引っ込み思案」であったと語る。そうしたところは現在も残っているようであるのであれば、ホーム

ステイの受け入れについて積極的に行っているのであろうか。ホームステイや外国籍住民支援ボランティアに関してはDさんの家族や親しい人々からの助言などがあったからかもしれない。

Eさんは、外国籍住民支援ボランティアを行うきっかけを外国人と接してみることや外国の知識を得るためであると捉えている。Eさんには過去、外国に旅行に行った経験が高校・大学とあり、また中学の時から外国人との接点はあったらしい。こうしたことやEさん自身がアフリカに行ってみたいという希望を持っていたこともあり、クラブ活動が引退を迎えた後、外国籍住民支援ボランティアに関心を持ったということであろうか。Eさんは、両親の「やりたいことはやらせる」といった教育のもと、アフリカへの興味など発展させる形で現在のボランティア活動を行っているようである。

Fさんが外国籍住民支援ボランティアを志したのは、闘病生活の中でなにか出来ることを探していたとき、たまたま広報で見つけたのだが、もともと外国語学部を出ていて外国語に興味があり、外国人も嫌いではなかった。時間も合っているからである。しかしFさんはもともと外国語にはそれほど関心がなかったようである。たまたま受験科目の都合で外国語大学を選び、学んでいく内に言葉に対する興味が芽生え、外国に行くことによって外国人も嫌ではなくなったということであろうか。そのFさんが外国人に対して嫌ではなくなった理由として、ホームステイの受け入れがあるようである。外国語大学出身の経緯からFさんは外国語（英語）が好きであり、地域の公共施設で英語を自主的に学び、またその中でその施設の介在によってホームステイも自主的に受け入れているようである。こうしたFさんに両親や親族からボランティアに対する親しみや外国人支援を感じさせるモノはないようである。

以上から、外国籍住民との共生について必要であると思われる要因は、①外国語教員の経験、

②外国語への関心, ③外国の事情への関心, ④地域に対する愛着, ⑤地域を外国人に紹介したいという思い, ⑥外国人を超越した人間への興味, ⑦仕事からみでの外国人支援の必要性, ⑧病気などの生活の変化, ⑨ホームステイの経験などである。一方, 生育環境についてはほとんど関係ないという結果になった。

4. 2. 課題

本稿の分析は, インタビュー結果のまとめという記述レベルにとどまっている。今後は, 上記に述べたいくつかの要因がどのように関係しているのかについて検討を加えたいと思う。また, 今回の調査ではインタビュー人数が6人と非常に少ないためインタビューの件数を増やすことが必要であるが, その際には, 日本人の外国籍住民支援として日本語教室だけではなく, 地域での外国籍住民との交流などのさまざまなケースでの取り組みに関わる日本人についてインタビューを試み, 日本人が外国籍住民と共生するための条件やその際の価値変容について考えたいと思う。

注

- 1) 入管統計によれば, 「平成14年末現在における外国人登録者数は185万1,758人で, 前年に引き続き過去最高記録を更新している。この数は, 平成13年末現在に比べ7万3,296人(4.1パーセント)の増加, 10年前(平成4年末)に比べると57万114人(44.5パーセント)の増加となっている。

る。外国人登録者の我が国総人口1億2,743万5,350人(総務省統計局の「平成14年10月1日現在推計人口」による。)に占める割合は, 1.45パーセントとなっている」(入国管理局 2003)。

- 2) 国際ボランティアは「地域開発」「地球環境」「人権擁護」「国際交流」などのテーマに分かれるが(大山 2002: 95), 海外の外国人支援グループが多く, 日本国内での外国籍住民支援のボランティア活動は少ないようである。

文 献

- 古川秀夫, 2002, 「自由記述による仮説の提起」,
古川秀夫編『現代日本のボランティア像』,
龍谷大学国際社会研究所。
入国管理局, 2003, 「平成14年末現在における外国人登録者統計について(概要)」, (<http://www.moj.go.jp/PRESS/030530-1/030530-1.html>, 2003.5)。
大山治彦, 2002, 「活動内容とボランティアニーズ」,
古川秀夫編『現代日本のボランティア像』,
龍谷大学国際社会研究所。
谷富夫編, 2002, 『民族関係における結合と分離』,
ミネルヴァ書房。

【付記】

本論は平成15年度佛教大学特別研究助成による研究成果の一部である。なお, H市日本語教室Sには, インタビュー調査を通じ, 多数の示唆をいただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

(おおつか たかお

佛教大学社会学部専任講師)

(とみかわ たく

佛教大学大学院社会学専攻後期博士課程)

Social Factors Supporting Foreign Residents: Based on Interview Data

Otsuka takao, Tomikawa taku

In this paper we attempted an analysis of the social factors that enhance the international living-together of foreign residents in Japanese local communities. For this purpose we interviewed Japanese volunteers supporting foreign residents. The results show that the following nine factors are positively evaluated for the living together of Japanese and foreign residents. 1) Experience of teaching a foreign language; 2) concern for a foreign language; 3) concern for situations in other countries; 4) love for the local community; 5) providing guidance about the local community; 6) concern for people as such; 7) support with respect to work for foreign residents; 8) care in case of illness or other problems; 9) experience of home-stay.